独立行政法人
国立病院機構
National Hospital Organization
MEDICAL URESHINO CENTER

うれしの

2017.11
第53号
【発行所】
嬉野医療センター
佐賀県嬉野市嬉野町
大字下宿丙2436番地

「九年庵の紅葉」

基本理念

「ひとり一人を大切に」

医療は患者さんの為のものであり、安心で安全な医療の実践が必要である。ひとり一人を大切にすることは、この医療の実践に重要である。この「ひとり一人」は、患者さんのみならず当院に関係する全ての人たちを指し、ひとり一人が大切にされることによって、ひとり一人が周囲を大切にする。このようにして、当院は人命を尊び人格を敬って医療に携わっていくものである。

運営方針

1 迅速で質の高い医療
2 安全で安心な医療
3 地域医療構想に基づく医療
4 患者さんの権利を重視した医療
5 適切な病院機能の更なる継続
6 経営基盤の確保と新病院建設
7 将来を担う医療人の育成
8 臨床研究と治験による医療への貢献

患者さんの権利

1 安全で、かつ平等な最善の医療を受ける権利
2 疾患の治療等に必要な情報を得、また教育を受ける権利
3 治療法を自由に選択し、決定する権利
4 プライバシーが守られる権利
5 常に人としての尊厳を守られる権利
6 医療上の苦情を申し立てる権利
7 継続して一貫した医療を受ける権利
8 生活の質（QOL）や生活背景に配慮された医療を受ける権利

杵藤地区
消防本部より

救急救命士気管挿管実習受入にて感謝状を頂きました

麻酔科部長　香月　亮

呼吸が止まったり弱くなったりした患者を助けるためには、人工呼吸が必要になります。バッグバルブマスクを用いる人工呼吸は、誰でもできるという利点がある一方で、いくつかの欠点があります。マスクのわきから空気が漏れるために十分な量の換気ができないこと、長時間続けることが難しいこと、空気を気管から肺へ送り込む際に食道から胃にも送ってしまい、胃内容が逆流して窒息（誤嚥）させる危険があることです。気管挿管を行えば、空気は気管から肺へ選択的に送り込めるため、十分な量で長時間にわたって誤嚥の危険なく人工呼吸ができるようになります。

気管挿管の実施は医師のみに限定されていましたが、心肺停止患者の救命率と社会復帰率を上げるために、2004 年から認定を受けた救急救命士も実施できるようになりました。認定を受けるためには、消防学校や養成所で講習を受けて知識と技術を得たのちに、患者への気管挿管を 30 症例以上経験することが必要です。救急外来での気管挿管を実習させることは時間的にも倫理的にもできないので、手術室で全身麻酔を受ける際の気管挿管を実習させてもらうようになっています。

手術を予定された患者は、ただでさえ手術と麻酔について不安を感じています。それに加えて挿管実習について説明して同意を得ることは心苦しいことです。挿管実習の必要性と安全性について丁寧に説明し、十分納得いただいたうえで同意を得るまでに、一人の患者当たり 30 分以上かかります。

佐賀県内では佐賀大学病院、県立病院好生館、唐津赤十字病院、嬉野医療センターが 2006 年からこの実習の受け入れを開始しました。佐賀県内で勤務する 280 人余りの救急救命士の中で、これまでに 64 人が挿管実習を修了し認定を取得しています。地域別の認定者は、佐賀広域（中部）が 120 人中 8 人、鳥栖･三養基地区（東部）が 42 人中 13 人、唐津地区（北部）が 41 人中 2 人、伊万里・有田地区

感謝状

香月 亮 殿

あなたは救急救命士気管挿管病院実習において長きにわたり指導医師として多数の救急救命士の実習を指導されその献身的な尽力で救急救命士の育成に多大な貢献をされました

よってここに深甚なる感謝の意を表します

平成二十九年七月三日

杵藤地区広域市町村圏組合
消防長　土井稔康

（西部）が 30 人中 17 人､杵藤地区（南部）が 51 人中 24 人となっています。

当院は伊万里・有田地区と杵藤地区からの実習を受け入れており、この 10 年間で 40 人を指導し修了させることができました。実習を指導することに加えて、患者同意を得ることも大変であり、指導医師の負担が重いこと、また、実習により研修医や若い医師が気管挿管を行う機会が減ってしまうなどの問題もあり、実習の必要性に疑問を感じる施設も多いようで、当院以外の修了者は少数にとどまっています。（大学 3 人、好生館 6 人、唐津赤十字 1 人、県外 14 人）。

救急救命士による気管挿管の実習指導の功績に対し、7 月 3 日に杵藤地区消防本部より感謝状を頂きました。実習指導を手伝ってもらった麻酔科医や挿管介助をしてもらった手術室看護師、手術での実習を認めてもらった主治医の先生方や案内をしてもらった病棟スタッフ、実習を受け入れる際の手続きをしてもらった事務の方々、そしてこの実習を許して頂いた院長先生、皆さんに対する感謝状であり、病院に対して頂いた感謝状と思っています。

先ほど、挿管実習の必要性に疑問を感じる施設もあると書きましたが、私はそうは思いません。人口が密集し救急対応できる病院までの救急搬送距離が短い地区に比べて、人口密度が低い郡部では搬送距離は長くなり、搬送中の確実な人工呼吸を行える気管挿管は重要であり、気管挿管実習の必要性は高いと考えています。

今後も、救急救命士の気管挿管実習を受け入れることによって地域医療の向上に協力していこうと思います。よろしくお願いいたします。

嬉野医療センターのスペシャリスト

感染管理認定看護師としての10年を振り返る

感染対策室 副看護師長　岩谷佳代子

「３年後に感染管理認定看護師になることを目指して頑張ってみない？」と、私が尊敬する看護師長さんから言われたのは、看護師になって５年目でした。「認定看護師」をインターネットで何度も検索しては、自分には荷が重すぎると感じたことを今でも覚えています。感染管理分野は患者さんのそばで看護を提供するのではなく、患者さんや職員を感染から守るために、病院全体を見渡して様々なデータを基に多職種への教育や相談等を行う組織横断的な役割を担います。私にとって高い目標でしたが病院の支援もあり、６か月間の研修修了後、平成 18 年に無事に資格を取得しました。佐賀県の中で感染管理分野では第一号、病院にとっても初の認定看護師誕生という周囲からの期待があり、合格通知を確認したときは安堵の思いで涙が止まりませんでした。気が付けば、あれから 10 年が経過しました。研修終了直後は、古い対策をやめて新しい感染対策を取り入れることが私の目標でした。新しい取り組みには大きなお金や人が動きますが、何よりもスタッフに理解してもらうことが大切です。嬉野医療センターを感染対策に強い病院にするために当時の古賀院長をはじめ多くの職員が理解と支援をしてくださり、他の病院よりも早く理想的な環境を実現させることができました。また、私が 10 年間力を注いできた活動の一つに講演活動が挙げられます。資格取得後は院外からの講演依頼が多く、平成 19 年度～平成 28 年度までに計 85 回の院外講演を行い、病院、保健福祉事務所、介護施設や保育園など多くの施設にも訪問しました。講演を聞いてくださる方々の時間を無駄に（そして退屈に）しないようにと一回一回の講演を精一杯努めています。講演活動は私自身にとっても大切な学びの場であり、活動を重ねた時間は私の財産です。責任の大きい役割ですが、つらい時に励ましてくれた上司や同僚、多忙な中でも感染対策を実践してくれる多くのスタッフのおかげで今の私がいます。そして現在は院内にも院外にも悩みを相談できるたくさんの仲間ができました。

感染対策担当者の目標は感染対策で結果を出すことです。病院での感染対策が目指す結果は患者さんや職員に「何事も起こらないこと（感染しないこと）」です。あたりまえのことのように思えるのですが、

日々の感染対策の積み重ねがあってこそ「あたりまえ」が維持できるのだと考えます。今後は地域の方々とも力を合わせた幅広い活動を目指しています。

認定看護師の２回目の更新者（10 年目）には、純銀製のルビー入り認定看護師徽章が贈られます。ルビーの輝きに負けないよう自分自身を磨いていきたいと思います。

がん化学療法看護認定看護師を目指したきっかけと、今の思い

副看護師長　井手千佳子

私が、がん化学療法看護認定看護師を目指したきっかけは、40 歳を目前とした、17 年間の看護師経験の化学療法看護に携わる中で、職場でがんと共に「生きる」ことに悩んだり苦しんだりしている患者様と関わり、「がん化学療法を受ける方々に、専門性を高めた看護を提供したい」と痛感したからでした。少々のことではへこたれない私ですが、2009 年に認定看護師教育課程の学校に入学した初めの頃は、がん化学療法に関する自分の知識・経験のなさに情けなくなりました。しかし、そのような時も、自分がここに来た目標を強くもっていたからこそ、がむしゃらに取り組めました。自分が最年長ではないだろうか？といった思いもありながらの入学でしたが、学生の年齢層は幅広く、同世代や自分よりも更に人生経験が長い人が意外に多い現状でした。仕事としての看護実践を離れ、看護の基本を振り返り学ぶことで、看護を見つめて再考することができ、自分の看護の姿勢に自信を持つことができました。年齢を重ねても熱い思いがあれば人は学び、成長することができると強く思いました。認定教育課程での６ヶ月は、がんの専門的知識の修得だけでなく、組織やチーム医療の中で、それをどのように伝え動くのかという学びを深めることができ、また自分の課題を見つけることもできました。

2010 年７月２日、念願の認定審査に合格することができました。実際に認定看護師として働き始めて、最初に感じたことは、学んだことと現実とのギャップでした。理想的な事を学んではきても、実際の現場でいつ、どのタイミングでその役割を果たすのかが見えず悩みました。しかし、周囲の上司やスタッフの協力があり、目の前にいる患者様と接する中で、１つでも患者様に応じた化学療法看護を実践できた時、やりがいを感じ、モチベーションを低下させることなく今まで継続することができました。がん化学療法看護に関わる全ての看護スタッフへ抗がん剤に関する新たな情報発信を行い、生活者としての患者様が受けるがん化学療法の苦痛が軽減できる看護を提供し、気持ちの上でも支えて意思決定を支援していくことが私の役割だと思っています。

うれしのSPA 42.195kmリレーマラソン2017

9月24日（日）嬉野市総合運動公園（みゆき公園）にて、うれしのSPA 42.195kmリレーマラソン2017が開催されました。

リレーマラソンとは、1チーム4人以上15人以内で編成し、1周2kmの周回コースを21周＋195mたすきリレーして、チームで42.195kmを完走するマラソンです。

走力に応じて個々にマラソンを楽しむことができるうえ、チームメンバー皆で力を合わせて42kmを走り切るという達成感も味わうことができます。

全86チームが参加、当院からは、循環器内科、心臓血管外科、放射線科の3チームが出場しました。

日頃から走りこんでいる人にとって、アップダウンが激しい嬉野のコースは、トレーニングのアクセントとなり心地良いものなのでしょうが、直前になってトレーニングを始めたその他大勢のメンバーにとっては、かなりタフなコース設定でした。

レースが始まれば、そのような言い訳が通じるはずもなく、3チームともに苦戦を強いられましたが、そこは日頃のチーム医療の賜物、各々に任された距離を全うしつつ、インターバルには声援でチームメンバーを鼓舞し、制限時間内に無事完走することができました。

また、会場内では地域の方々から、「日頃からお世話になっています」「今後ともよろしくお願いします」との声を多数いただき、当院に対する信頼を嬉しく思うとともに、改めて地域に根差した質の高い医療の提供に貢献していきたいという思いを抱くことができました。

秋も深まってきました。食欲、読書、芸術もいいですが、秋といえばやはりスポーツ。今日からウォーキング、ジョギング始めてみませんか？

来年は、今年以上に大勢の職員と参加できることを楽しみにしています。

文責：放射線科医長　平川浩一

放射線科

心臓血管外科

循環器内科

9位	放射線科	平川浩一、小濱義幸、堀上英昭、上山史貴、山下りか、佐藤 基	3時間12分50秒
50位	心臓血管外科	陣内宏紀、古賀佑一、山口静香、平松史帆、久保 勤、吉武薫子、穐山博人、松尾大地、納所哲也、島田 綾、松浦瑞華、原 陽子、酒井亜佳里、石井李奈	3時間20分28秒
54位	循環器内科	下村光洋、三輪高士、柿本洋介、河野佑介、北村純一、吉田匡吾、大拔心平、川尻亮太、深町友里、神村ひとみ、末長冬美、永吉春奈、尾形桃香、白武功児、落合 翼	3時間22分32秒

リハビリテーション科
他職種対象の勉強・研修会の開催

リハビリテーション医療は、全人的なアプローチを必要とするため、他職種との連携が非常に大切になります。そのため、リハビリテーション科では知識や技術の共有を目的に他職種からの依頼を受け、勉強会や研修会を行っています。

今年度も病棟スタッフに対して「トランスファーの介助方法について」や「脳血管障害患者に対する移乗動作、ポジショニング」などの勉強会を行ってきました。そして９月にも他職種対象の勉強会・研修会を行いました。

まずは９月 19 日に例年行っている放射線科との合同研修会を開催しました。今年は指山 PT による「呼吸リハビリテーションについて」というテーマで研修を行いました。呼吸器疾患の特徴や評価方法、呼吸リハビリテーションの進め方など様々な内容について多くのことを学ぶことが出来ました。また、ストローを使用し実際の呼吸器疾患患者の息苦しさを体験する時間もあり、患者さんの症状や状態を把握するうえで、非常に有意義な体験をすることが出来ました。

また、９月 21 日に開催された全職員対象の医療安全セミナーでは、岡村士長による高齢者の転倒について「転倒と活動について～理学療法士の視点から～」というテーマでの講義が行われました。「何故転倒するのか？」といった素朴な疑問に対して、転倒のメカニズムや様々な論文や資料から転倒と活動性との関係などを詳しく学ぶことが出来ました。

今後も「THA（人工股関節全置換術）、BHA（人工骨頭置換術）に対するリハビリテーション」についての研修も予定されています。これからも他職種との連携を図るために、リハビリテーション科として様々な面で貢献できればと思っています。何かご相談があればいつでもスタッフに声をかけてください。

文責：リハビリテーション科　金丸裕貴

勉強・研修会の様子

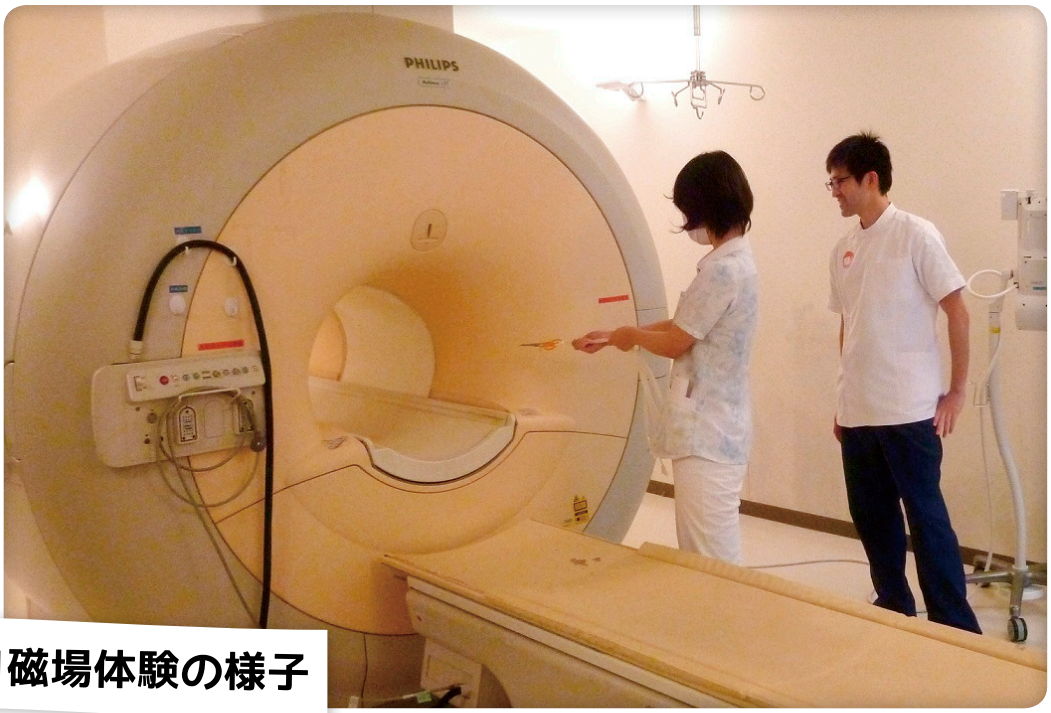
MRI磁場体験を開催して

放射線科　白坂菜摘

嬉野医療センターの医療安全週間に伴い、放射線科では７月 11 日と 13 日に MRI 室での吸着事故撲滅を目指す意味で「MRI 磁場体験」を開催しました。

MRI 装置は 24 時間常に磁場が発生しており、患者だけでなく医療スタッフの磁性体持込事故が多く発生しています。体内埋め込み金属であるペースメーカーや、ペン、ヘアピンなど小さなものから、車椅子やストレッチャー、酸素ボンベなど大事故につながるものもあり、海外では死亡事故も発生しています。MRI 装置についての安全セミナーは毎年行っていましたが、スライドでの講義だけでした。今回は医療安全週間に合わせて、MRI 装置がどれくらいの磁場を発生しているのかを実際に体感してもらうために、金属による吸着体験を行いました。

まず、MRI 室に入る前に、磁性体を持ち込まないための金属探知機によるチェックなどの説明を行い、MRI 室専用の車椅子、ストレッチャー、点滴スタンド、SPO2 モニターがあることを知ってもらいました。また、万一磁性体が吸着した場合の対処法についての説明も行いました。その後、検査室内で紐付きのハサミを持ち、装置に近寄ってもらい、ハサミがどのくらい装置に引っ張られるのかを体感してもらいました。「すごく引っ張られた」と言われている方や、「思ったより引っ張られなかった」と言われている方がいました。今回は磁場体験ということもあり、危険が無いように小さなハサミで磁場を体験してもらったために、思ったより引っ張られないと感じた方がいたかもしれません。人により感じ方は様々でしたが、高磁場の危険性を知ってもらうことができたと思います。



MRI磁場体験の様子

こちらの予想をはるかに上回る、約 110 名の方に参加していただきました。業務終了後に疲れているにもかかわらず、たくさんの方に来ていただき大変ありがたく思います。この安全セミナーにおいて磁場を実際に体感することで、磁性体を持ち込むことの恐ろしさをより多くの方に知ってもらえたのではないかと思います。今後、持ち込み事故が起こらないためにも、検査に携わるすべての人の意識付けが大切だと思うので、今回体験したことを思い出し、細心の注意を払いながら放射線科スタッフと院内すべてのスタッフの協力のもと、安全に検査を行っていけたらと思います。

今回業務の都合などで磁場体験をできなかった方で、磁場体験をしたいという方はいつでも MRI 室にお越しください！！歓迎しますよ。

MRI磁場体験の感想

東2病棟　看護師

今回の磁場体験を通して、改めて MRI 検査の怖さを実感し、自身が注意すべき点を再確認できた。

小さなはさみであっても機器に引き付けられる威力が強く、もしも他の物であればどれだけの被害が出るであろうと考えると、とても恐ろしいと感じた。

看護師が普段何気なく身につけている物でさえも、検査時には患者の凶器となる可能性もあり、検査室入室時の確認を徹底して行っていきたい。

また、MRI で事故が起きると、患者への影響だけでなく病院経営への影響もあるため、今後はそれらも考えながら行動したい。

庶務課職員

私の MRI に対する知識は、医療安全ニュースで毎年のようにヒヤリハットが報告され、嘘か誠か、「１回停止したら○千万かかる」というくらいのものでした。今回、磁場体験があると聞いて、現場を知る良い機会と思い、参加させていただきました。

金属製品は袋に入れておくように言われ、院内 PHS、鍵類など袋に入れて、待ちに待った磁気体験。技師の立ち会いの下、紐付きのハサミを持って、「左手は外してもいい」と言われ、右手だけで持つと、あっという間にハサミが吸い寄せられました。あまりの早さに声も出ず、「これが磁気か」とただただ感動しました。他の人たちの体験を見ても、MRI に向かってハサミが吸い込まれる様は圧巻で、本当に百聞は一見にしかずでした。今回はいい体験をさせて頂きました。ありがとうございました。

嬉野医療センター フットサル部 部員募集

嬉野医療センターフットサル部部長、臨床工学技士の吉田です。

はじめにフットサルとは簡単に言えばサッカーのミニチュア版でゴールキーパーを含めて５対５で行うスポーツです。

私たちの部は、毎週木曜日 18 時半～ 20 時半の２時間で嬉野医療センター附属看護学校体育館にて行っています。

現在部員は医師、看護師、臨床工学技士、放射線技師、作業療法士、薬剤師、院外の方、看護学生で経験者が少なく、未経験者が多い部になっています。個性的な部員が多く、年齢問わず楽しく活動しています。

活動内容としては男女混合で試合をしています。
試合と聞いたらガツガツしたプレーや思いっきりシュートしているイメージがあるかもしれません。しかし、ガツガツしたプレーもなければ、部にゴールが無いので思いっきりシュートをすることもありません。そして、来た人全員が楽しめるよう特殊なルール「嬉野ルール」というのがあり、毎回笑いの絶えない時間を過ごしています。

嬉野ルールが何なのかは来てからのお楽しみです。

時々ですが、大会に出場したり他病院と試合を行ったりもしています。ちなみに前回ビギナー大会に出場したときは準優勝しました。さらに、部員の看護師が MVP を取りました！

今年から佐賀県病院対抗フットサル大会が開催されることになりました！！！

また、他職間での交流もできます。私自身嬉野医療センターに来て３年目になりますが、フットサル部に入ったことで院内の廊下を歩いていると声をかけてもらったり、自分から声をかけたりと知っている人が増え、働きやすい環境になってきていると思います。

経験者、未経験者楽しく活動している部なので、フットサルをやってみたい、健康のために運動したい等の理由で一度足を運んでみてはいかがでしょうか？

いつでも歓迎します。一緒にフットサルをしましょう！よろしくお願いします。

看護学校オープンキャンパス

平成 29 年 7 月 22 日（土）オープンキャンパスを開催しました。
学生、保護者合わせて 132 名の方に参加いただきました。

高齢者体験

血圧測定

リネン交換

車椅子・杖体験

肺音聴診体験

この学校に入学して３ヶ月、オープンキャンパスの企画・運営を自分達ができるのかとても不安でしたが、リーダーを中心にクラスで意見を出し合いながら準備を進めてきました。当日は学生リーダーとして各会場を回りました。参加してくださった方が思いのほか多く、全部の会場を回れるのか心配もありました。しかし、メンバーの学生の協力もあり全ての会場を見ていただくことができました。自分がこの学校に入学する前はどんなことが知りたかったか考えながら企画したことが好評でとても嬉しかったです。看護学校に進学を考えている学生の方に少しでも本校の魅力や、看護に関する学習に興味を持ってもらえたと思います。伝えきれなかったこともたくさんあります。来年この学校で一緒に勉強できる仲間をお待ちしています !! 次回は学校祭と同時進行で 10 月 7 日（土）に開催します。たくさんの方に当校の魅力を伝え、一緒に学び合える仲間を増やしたいです。

嬉野医療センター附属看護学校１年

部門紹介

患者支援センター（地域医療連携室）

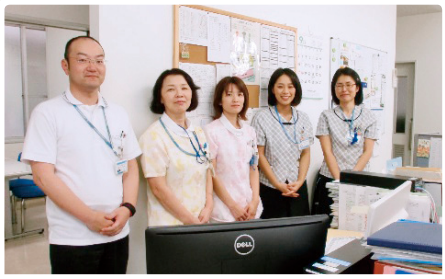
地域医療連携係長　岩﨑藤子

地域医療連携室は平成 28 年度より、「患者支援センター」としてリニューアルいたしました。患者さんをご紹介いただいた病院、施設からの外来受診、入院の準備に関する説明、入院から退院に向けての退院支援など、患者さんを外来から入院、退院後までサポートしていく部門として日々取り組んでいます。もともと地域医療連携室は多職種で構成されていましたが、患者支援センターとなったことでスタッフ数が増え、業務も幅広く行っています。

これからの高齢化社会で患者支援、地域医療連携は重要な役割を担っています。自分たちの役割を認識し、病院内外のつなぎ役として質の高いサービスを提供できるように努力していきたいと思います。

連携室受付

退院支援専従看護師


ソーシャルワーカー、コーディネーター

入院支援センター、相談窓口

病診連携、病病連携業務（前方連携業務）では、地域の医療機関等からの紹介患者さんが 1 日約 50 人（救急患者、検査のみを含む）当院を受診されますので、その予約、受付業務を行っています。そのほかに診療情報提供書の管理、入院患者さんのご報告など、紹介元の先生と紹介診療科の橋渡し役として、患者さんがスムースに受診ができるように日々努力しています。また、佐賀県の診療情報地域連携システム（ぴかぴかリンク）の患者登録を行い、地域の医療機関の診療のサポートを行なっています。

退院支援、退院調整（後方連携業務）ではソーシャルワーカー、退院支援専従看護師が入院患者さんの退院後療養先選択、サービス調整などを行っています。また、病棟スタッフと協働して患者さんの生活に合わせた退院支援を行っています。昨年より看護師が専従で退院支援業務を行うようになりましたが、当初は不慣れなこともあり、恐る恐るケアーマネージャーや転院先の病院への連絡を行っていました。しかし、経験を重ね、同じ専従の仲間とともに学習していきながら役割を果たせるように努力しています。

入院支援センターでは治療・検査のための入院が決まった患者さんに、入院手続きや持参物品などの説明を行っています。同時に入院や治療に際しての不安など傾聴して安心して入院が出来る様に毎月 160 ～ 170 名の患者さんの支援をしています。

患者支援センターでは、その他に糖尿病、肝炎など専門領域のコーディネーター看護師や医療福祉、がん相談のソーシャルワーカーなど多職種で患者さんが抱える様々な不安や問題の相談対応も行っています。多職種が集まっていることが当院の患者支援センターの強みです。

西４病棟

副看護師長　南川栄子

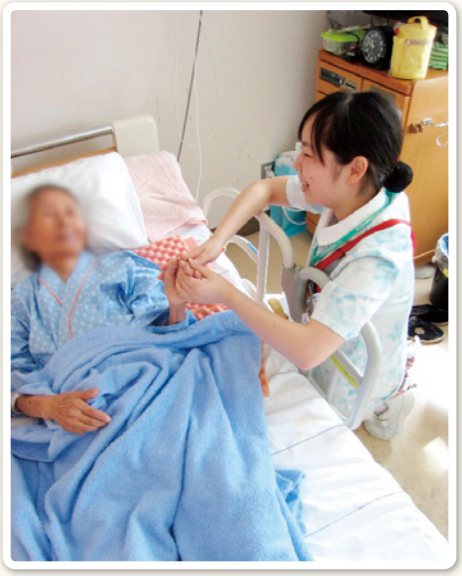
西４病棟は消化器内科の病棟です。

病床数は 50 床で、消化器・肝臓疾患などの急性期治療からがん化学療法や終末期ケアまでの様々な患者さんが入院をされています。入退院が多く慌ただしい病棟ですが、受持ち患者さんが安心して入院生活を送れるよう、また患者さんのその人らしさを大切にしたいという思いで、笑顔とやさしさと真心をもった看護を目指しています。

西４病棟の事例を紹介します。

終末期の患者さんで「もう一度自宅に帰りたい」と言われた方がおられました。その方は自分で呼吸し酸素を取り込むことが難しく、酸素吸入をされていました。酸素が必要なので「自宅に帰ることは難しい」と、退院を断念することになるところですが、スタッフが「もう一度自宅に帰らせてあげたい！」と声を上げました。主治医、緩和ケアチームと共にカンファレンスを行い、安全・安楽に帰宅できる方法を考え、まず家族の協力のもと自宅へ数時間の外出をするという段階を経て、無事に退院することが出来ました。その数日後、病院へ戻られましたが、最期まで希望する自宅で過ごせたことを、「家は良かった。帰れて良かった。」と以前より明るい表情で話されていました。

治癒困難な状況や終末期にある患者の皆さんと関わらせていただくことが多く、日々看護の難しさを実感していますが、西４病棟スタッフは患者さんが病気と向き合いながらも、その人らしさを大切に過ごせるよう全員でサポートします。



国立病院機構九州対抗野球大会レポ

9月30日(土)。太陽が眩しい青空の下、轟の滝公園野球場に男女年齢経験問わず総勢40名を超える球児たちがNHO九州グループ対抗草野球大会（非公式）に集まった。

第1試合は、嬉野医療センターチームと九州医療センター＆九州グループチームの対戦だ。ボテボテの内野ゴロがヒットになったかと思えば、鋭い当たりがファインプレーでアウトになる。120キロを超える剛速球の投手と一塁まで届かない三塁手が共闘した試合は終わってみれば、7－1で嬉野医療センターの勝利となった。続く第2試合は嬉野医療センターと宮崎東病院＆長崎医療センター連合チームとの対戦だ。嬉野医療チームは総勢20名近くいるため、守備位置はなんと毎回ランダムで守る。そして打順もじゃんけんで決める。完全に打ち取ったフライも正面のゴロもなぜかヒットになり、初回に嬉野医療センターは4点を失ってしまった。味方からは「送球届かない。ここ穴だから。こっちに打たないで。打たないでいこー」とよく分からないかけ声に笑いが溢れた。その後試合は打ち合いとなり、6点を返して逃げ切り、6－5で接戦を制した。最終試合の九州医療センター＆九州グループチームと宮崎東病院＆長崎医療センター連合チームの試合は初回に5点をとった宮崎＆長崎チームが8－3で逃げきった。

照りつける日差しが弱まった夕方には皆、肌は焼け、額には汗が輝いていた。全3試合の総合結果は嬉野医療センターが1位を飾ったが、来年また野球大会をやる頃には今年の結果なんて皆忘れているだろう。野球をすることが楽しくて集まる。試合の後のビールを飲みたくて集まる。そこに勝敗は関係ない。楽しんだもの勝ちなのだ。　文責：庶務係長　宮﨑陽悠

1

2

3

写真1：当日は雲ひとつ無い青空。遅れてきた夏模様だ。
写真2：嬉野医療の4番は（じゃんけんで勝てる）運が良いものが担う。
写真3：第三試合。九州医療の代打登場。この後見事ヒットを放った。

『倫Cafe』のご案内

西2病棟
今村果奈代

当院には副看護師長が28名おり、4つのグループに分かれ様々な活動を行っております。その中のひとつに倫理推進グループがあり、平成28年1月より“倫カフェ”を開催しています。

倫カフェは、倫理的な問題について気軽に話し合う場を提供するという取り組みです。倫カフェを通して倫理的問題の検討方法を学び、各部署で倫理カンファレンスを行うことができることを目指しています。お茶やお菓子を頂きながら、10人前後の少人数で行っています。現在は、模擬事例で行っていますが、参加者からの事例提供も大歓迎です。

倫理的な問題を話し合う時に大事なことは、関係している人の考えをできる限り全て出し合うことだとグループでは考えています。そのために、参加メンバー全員が意見を出せるようなアットホームな雰囲気づくりを心掛けています。参加者の皆さんにも、毎回参加して良かったという気持ちを持っていただいています。

最終的には看護部の枠を超え、院内の全ての職員の方に参加して頂きたいと思っています。皆さんのご参加を心よりお待ちいたしております。